

日中科学技術交流の歩み 初期 10 年(1977 年～1987 年)

序文

「1957 年に郭沫若中国科学院院長に招かれて訪中した日本物理学代表団が中国の物理学者と交流したときに、双方共にこれからも学術交流を続けたいと切望し合意して、その旨を筆記した「覚え書」を交換した。以来両国の真摯な科学者達が、学術交流の実現を目指して協力と努力を傾注し続けた。

1977 年に日中科学技術交流協会(以下協会と略記した場合はこれを指す)が設立されて、日本側の交流任務を受持つ組織となり、中国側は中国科学院・中国科学技術協会・中国国際科学技術交流委員会の 3 組織が交流担当者としての任務を持って、継続的な交流が開始されることとなった。

以来、両国間の必然的な活動として、双方の多数の科学者・技術者が熱心に交流に参加協力して、続々と見事な成果を挙げてきた。

言うまでもなく交流とは、関与する者同士が平等の立場に立って物事がなされるべきものであって、たとえ指導などという言葉が使われることがあっても、指導することは同時に教えられるという点も当然内包するものであることを忘れてはならない。

協会が扱った事柄は克明に協会の会報に記載されて会員諸氏に届けられているが、日中交流の黎明とも言うべき協会成立までの経緯と、協会成立後、1978 年から 1987 年まで私が協会会长として在任中に取扱った日中の交流・訪中・訪日・招聘による諸学会等の講義報告や、中国での重要事項等についての後に続く人たちにとって多少なりと参考になるような事項を抜粋して編集した。これが何かのお役に立てば幸甚である。事項によっては省略したもの、概略を記したものも少なくないが、会報の号、頁を記したので、詳しくはそれを参照されたい。なお会報からの引用・転載について御快諾いただいた協会理事会ならびに署名記事の著者各位に厚く、御礼申し上げる。

またこのような地味な本書の出版に御協力下さった東方書店の安井正幸会長と朝治之副編集長に心から感謝申し上げる。」